

Working Paper Series in Attached School Database Project

**Report on the panel survey of the graduates of
the Secondary School Attached
to the Faculty of Education, University of Tokyo**

Tomoyuki Yokohara, Yuki Ueno, Ichiro Hidaka,

and Hideto Fukudome

The University of Tokyo

March, 2022

No. 9

Center for Advanced School Education and Evidence-Based Research

Graduate School of Education, The University of Tokyo

東京大学大学院教育学研究科附属 学校教育高度化・効果検証センター

卒後継続調査の実施状況に関する報告：

—東大附属中等教育学校の卒業生を対象として—

横原知行（東京大学）

上野雄己（東京大学）

日高一郎（東京大学）

福留東土（東京大学）

Report on the panel survey of the graduates of the Secondary School Attached
to the Faculty of Education, University of Tokyo

Tomoyuki Yokohara, Yuki Ueno, Ichiro Hidaka, and Hideto Fukudome
The University of Tokyo

Authors' Note

Tomoyuki Yokohara is a project researcher at the Center for Advanced School Education and Evidence-based Research (CASEER), Graduate School of Education, the University of Tokyo.

Yuki Ueno and Ichiro Hidaka are project assistant professors at the Center for Advanced School Education and Evidence-based Research (CASEER), Graduate School of Education, the University of Tokyo.

Hideto Fukudome is the Director of the Center for Advanced School Education and Evidence-based Research (CASEER), Graduate School of Education, the University of Tokyo.

Abstract

This paper reports how we conducted the panel survey (“Learning and Work Alumni Survey of the University of Tokyo”) for graduates of the Secondary School Attached to the Faculty of Education, University of Tokyo (SSAFE). The purpose of the survey is to articulate students’ data from school matriculation to their schooling and work since graduating from SSAFE. From September to October 2021, we sent the questionnaires to graduates of SSAFE (class of 2016); we got 55 respondents. The following items are excerpted from the question items in this panel survey. We report the characteristics of the graduates of SSAFE. In this paper, we refer to (1) learning at SSAFE; (2) learning at the university; (3) learning through work; (4) impact of the spread of the new coronavirus infection; (5) “inquiry,” “citizenship,” and “cooperation,” which are unique to learning at SSAFE. Finally, we analyze survey data from the perspective of the connection between learning in secondary education and higher education and work, and discuss future issues, paying particular attention to the development of “inquiry,” “citizenship,” and “cooperation”

Keywords : graduates panel survey, comprehensive learning, inquiry, citizenship, cooperation

卒業後継続調査の実施状況に関する報告：

—東大附属中等教育学校の卒業生を対象として—

1 卒業後継続調査の目的

本稿では2021年度に行われた卒業後継続調査の実施状況について報告する。これまでに、附属学校データベースプロジェクトで調査されたデータを利用して、東京大学教育学部附属中等教育学校（以下、東大附属）の教育における効果検証が多く報告されてきた（例えば、本田，2018；喜入，2019）。2021年度より、東大附属と東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センターと共同で、新たな調査プロジェクトが開始された。当プロジェクトの目的は、在学時からの継続調査（東大附属卒業後約4年半後）を通して、中学・高校在学時の学びの経験が、進学先での学びや就職後の仕事の取り組みにどのような影響をもたらすのかについて検討することである。本稿では2021年度に行われた卒業後継続調査の実施状況について報告する。

2016年度より実施されている在校生パネル調査のデータと今回の卒業後継続調査のデータを紐づけることで、東大附属における総合学習の経験や在学時の価値観や性格、学力などが、高等教育での学びや就労にどのように関係するのか明らかにすることができる。東大附属における総合学習では教科の学習だけでは得られない幅広い体験があり、1・2年生時は自主的な学習態度を育成する「総合学習入門」（基礎期）、3・4年生時は自主学習・自治活動の充実を図る「課題別学習」（充実期）、5・6年生時は将来の進路選択に向けた能力を養成する「卒業研究」（発展期）という、3期に分けた学びの実践が行われている（東京大学教育学部附属中等教育学校，2020）。なお、本

稿では在学時のデータと紐づけたものではなく、卒業後継続調査で得られた集計結果を以降の節で紹介する。

2 調査対象者

調査は2021年9月から10月にかけて、2016年度卒業生を対象に、Web上で回答を依頼する形態により実施した。2017年度の卒業生パネル調査と同様に（東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター，2018）、同窓会報送付会社を介して調査依頼書が送付され、2016年度卒業生114名（住所不特定者12名）のうち、55名（有効回収率48.2%；男性30名、女性25名）から回答を得た。調査協力者の内訳として、進学者54名（うち、大学進学者53名、分類不明者1名）¹⁾、現就労者20名（うち、大卒者19名、高卒者1名）²⁾であった。

卒業後継続調査の実施状況を報告するにあたり、以下について付言しておく。当該調査では調査協力者から同意を得ていることや回答データは匿名化、暗号化されており、個人情報とは特定されないこと、そして、ファイアウォールなどで多層防御したコンピューターに厳重に管理されていることなど、倫理的配慮ならびにデータの管理は徹底されている。また、東京大学大学院教育学研究科附属学校データベース管理運営委員会より、データの使用許可を得た上で当報告書を作成した。

3 調査報告

2021年度の卒業後継続調査では「東大附属での学び」「あなた自身のこと（例えば、探究性・市

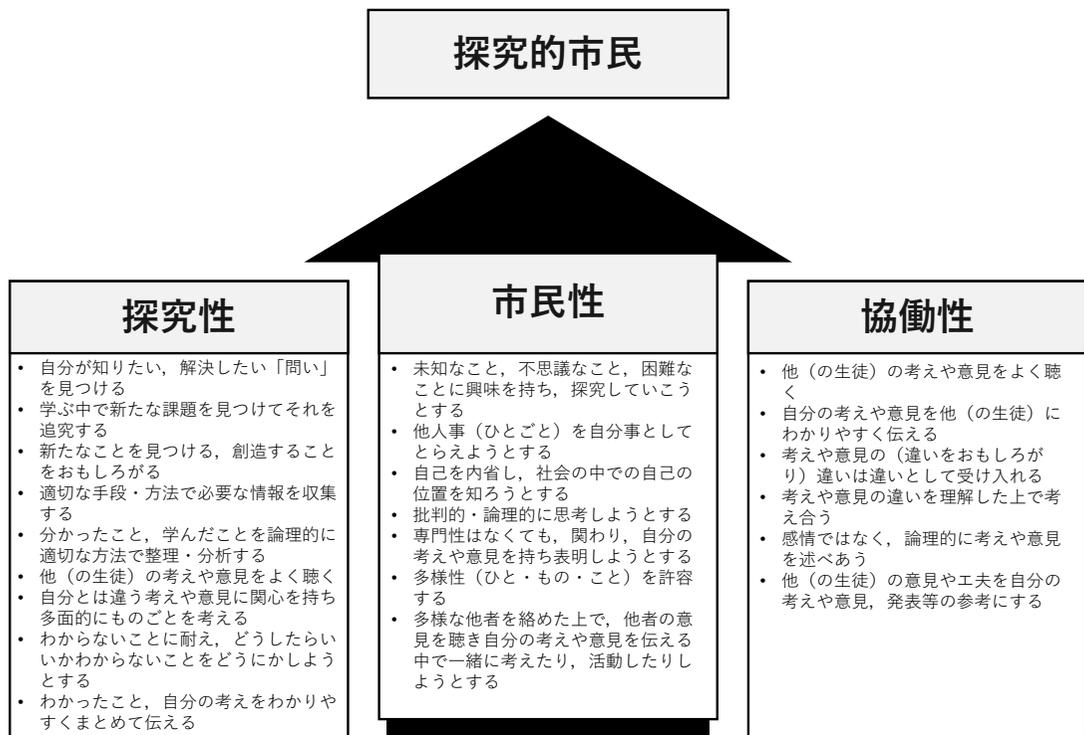
民性・協働性、社会情動的能力、健康状態、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う生活の変化など)「進学先での学び」「仕事での学び」「家庭」から調査票が構成されている。本稿では質問項目の一部を抜粋して東大附属の卒業生の特徴について分析する。また便宜上、回答方法を一部集約し、東大附属の回答傾向を見ていること、特定年度の一部の卒業生のみデータであるため、結果の解釈には留意したい。

具体的には、(1) 東大附属での学び、(2) 進学先での学び、(3) 仕事での学び、(4) 新型コロナウイルス感染症拡大の影響、(5) 探究性・市民性・協働性 (図1: 東京大学教育学部附属中等教育学校, 2018) の5点である。そして、最後に中等教

育における学びがいかに高等教育と仕事に影響を及ぼしたかという視点から、特に東大附属の教育目標である探究性・市民性・協働性の涵養に注目して、考察を行う。なお、本稿ではデータを集計する上で、統計解析プログラム HAD17.204 (清水, 2016) を使用した³⁾。

3.1 東大附属での学び

本節では東大附属在学時の学習に関連する3項目を取り上げる。はじめに「総合学習への取り組み方」、次に「総合学習内での学習経験」、そして「総合学習に対する効力感」である。質問項目は附属学校データベースプロジェクトで実施されている卒業生パネル調査 (喜入, 2019) や在校



注) 東京大学教育学部附属中等教育学校 (2018) をもとに著者らが改変

図1 「探究性」「市民性」「協働性」の関係と育成のイメージ図

生パネル調査（川本，2020）から抜粋している。なお、総合学習内での学習経験では一部質問項目の改変（「テーマを考え、話し合いや助言を踏まえて決める」「クラスやグループの前でまとめたものを発表する」）を行っており、「課題別学習」と「卒業研究」に分けて回答を求めている。

まず図2に示した「総合学習への取り組み方（4件法「1：とても興味を持って取り組んだ—4：興味を持って取り組まなかった」）」について、集計の結果、「3，4年生での課題別学習」では、「とても興味を持って取り組んだ+やや興味を持って取り組んだ」と回答した者は89.1%を示した。「5，6年生での卒業研究」においても、85.5%が「とても興味を持って取り組んだ+やや興味を持って取り組んだ」を選択しており、多くの東大附属の生徒が総合学習の「課題別学習」、「卒業研究」とともに意欲的に取り組んでいることが示されている。

次に、「総合学習内での学習経験（4件法「1：よくやった—4：ほとんどしなかった」）」について、図3の「課題別学習」ではいずれの項目において

も「本や新聞などを読む」（67.3%）を除き、「よくやった+時々やった」が69.1%を超えていた。特に「インターネットで調べる」（90.9%）と「実習、実験、製作、体験活動などを行う」（89.1%）は高い割合を示した。「本や新聞などを読む」より「インターネットで調べる」が高い割合を示したことは、中等教育においても情報化が進んでいることを示している。

一方、図3の「卒業研究」については「よくやった+時々やった」がいずれの項目においても67.3%を超えていた。特に「インターネットで調べる」（98.2%）は「課題別学習」と同様に高い割合を示したが、「実習、実験、製作、体験活動などを行う」（67.3%）は「課題別学習」と比較すると低い割合となった。「卒業研究」において「実習、実験、製作、体験活動などを行う」が低い割合となったのは多くの生徒が大学受験の準備に時間を要することなどが理由として想定される。

続いて、図4に示した「総合学習に対する効力感（5件法「1：特に効果があった—5：ほぼ効果が見込めなかった」）」では、「特に効果があった

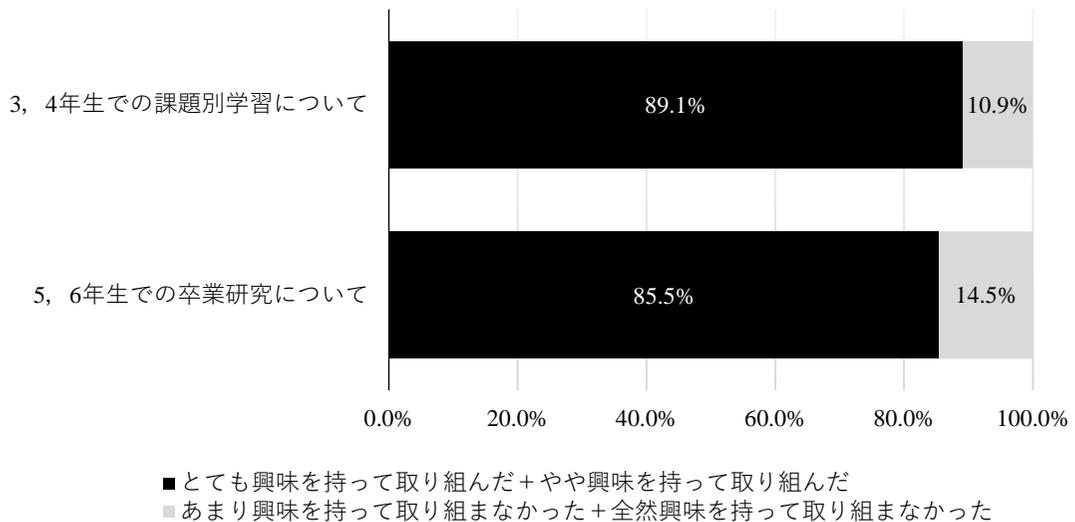


図2 総合学習への取り組み方

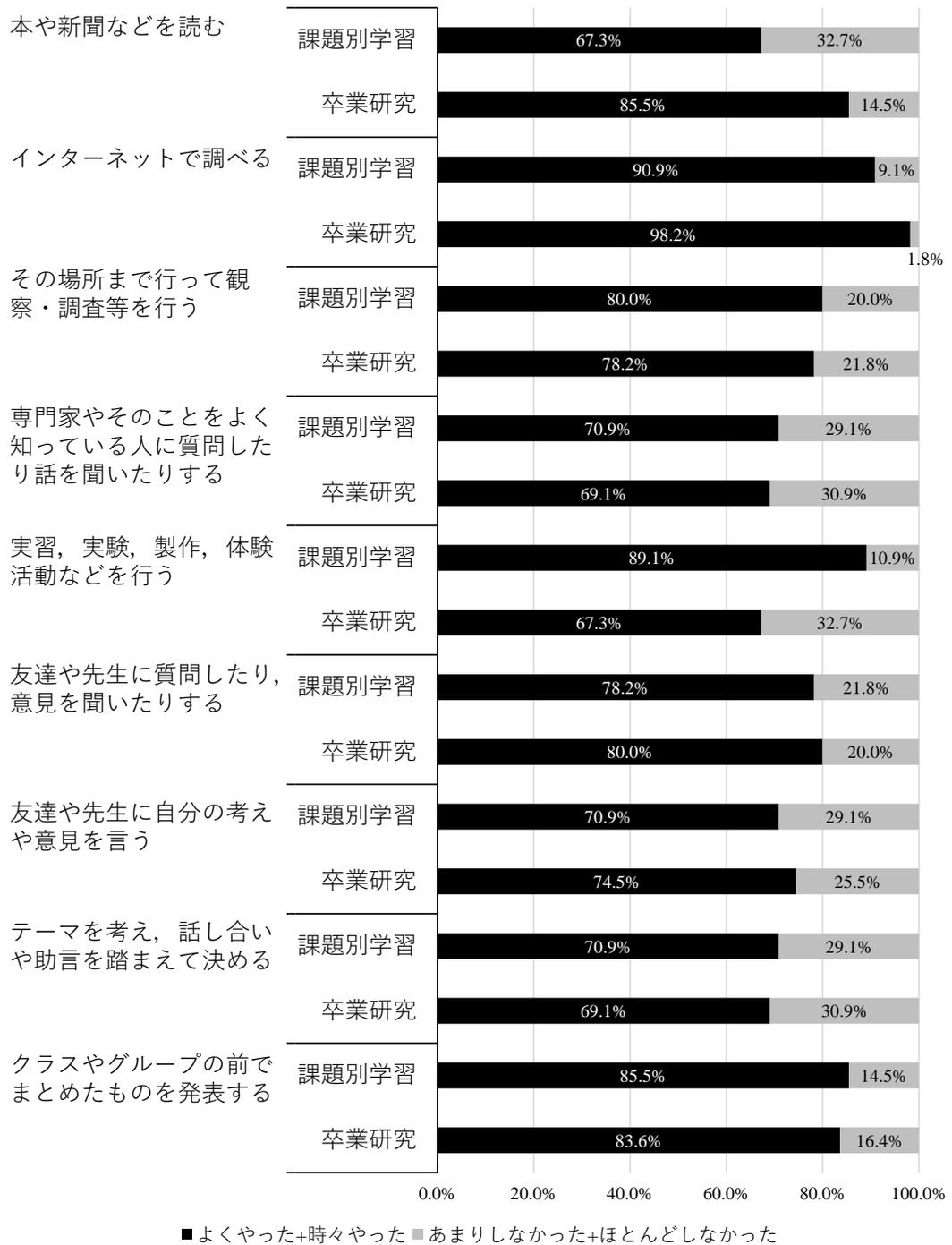


図3 総合学習内での学習経験

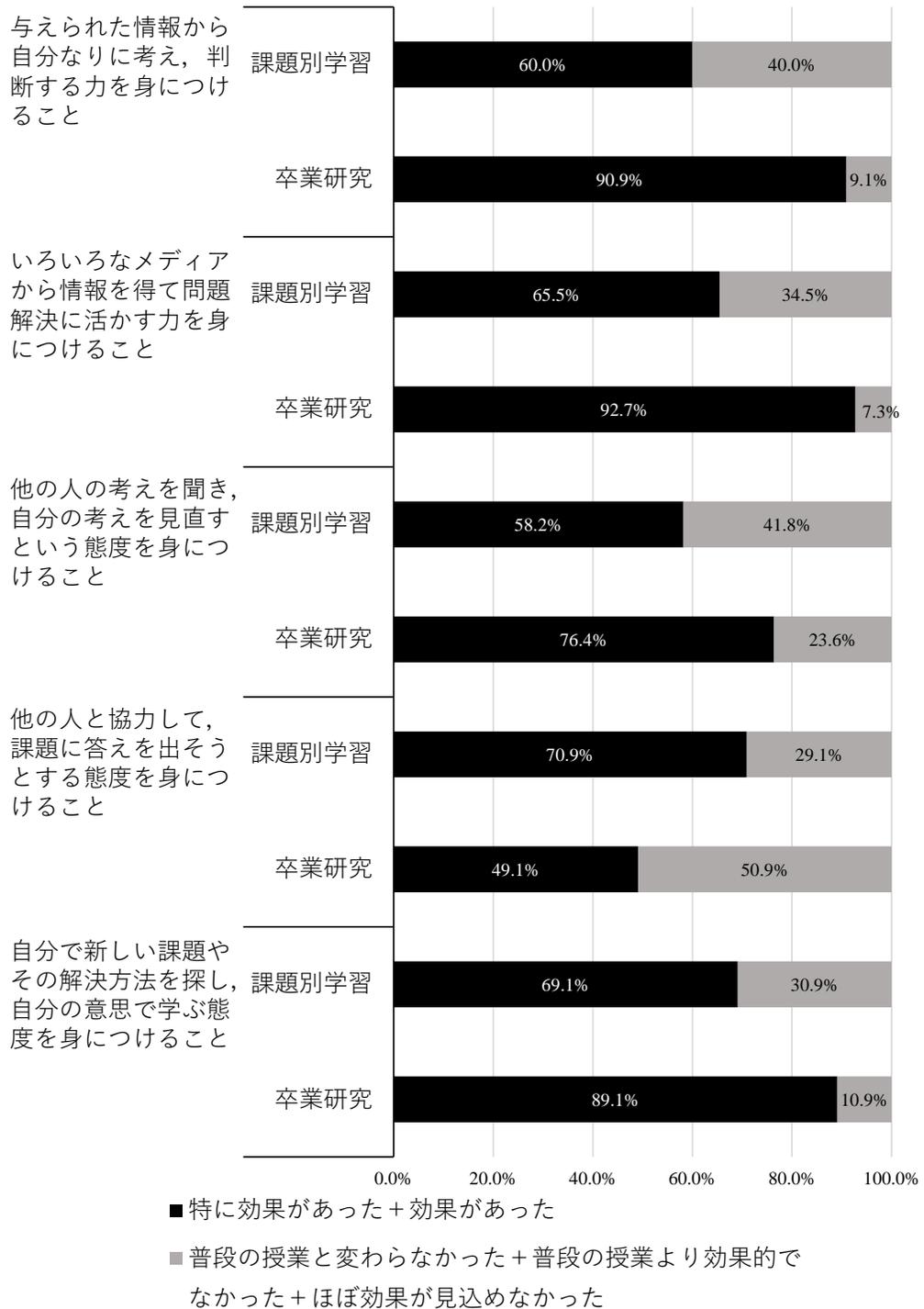


図4 総合学習に対する効力感

「効果があつた」について、特に「いろいろなメディアから情報を得て問題解決に活かす力を身につけること」は「課題別学習」においては65.5%であったが「卒業研究」では92.7%、「与えられた情報から自分なりに考え、判断する力を身につけること」は「課題別学習」においては60.0%であったが「卒業研究」では90.9%といった違いが見られた。上述から、東大附属の生徒の多くが、年次が上がるにつれ主体的に総合学習に取り組んでいることが理解される。

3.2 進学先での学び

本節では進学先での取り組みに関する3項目を扱い、進学者54名を分析対象とした。はじめに「進学先での学習アプローチ」、次に「進学先での演習授業への取り組み」、そして「進学先での卒研・卒論への取り組み」である。「進学先で

の学習アプローチ」では河井・溝上(2012)より、「深い学習アプローチ」と「浅い学習アプローチ」の下位尺度毎に3項目ずつ抜粋し、回答方法は溝上他(2016)に準拠した。また「進学先での卒研・卒論への取り組み」、「進学先での演習授業への取り組み」の質問項目については、卒業生パネル調査(喜入, 2019)や荻谷(2013)の文部科学省21世紀COE「基礎学力育成システムの再構築」の一環として実施された調査から抜粋している。

まず、図5に示したように、「進学先でのアプローチ(5件法「1:あてはまる—5:あてはまらない」)」では「あてはまる+どちらかといえばあてはまる」と回答した者のうち、最も高い割合を示したのは「自分がすでに知っていたことと結びつけて、授業内容の意味を理解しようとする(深い学習)」(92.6%)であり、続いて「様々な見方を考慮して、問題の背後にあること

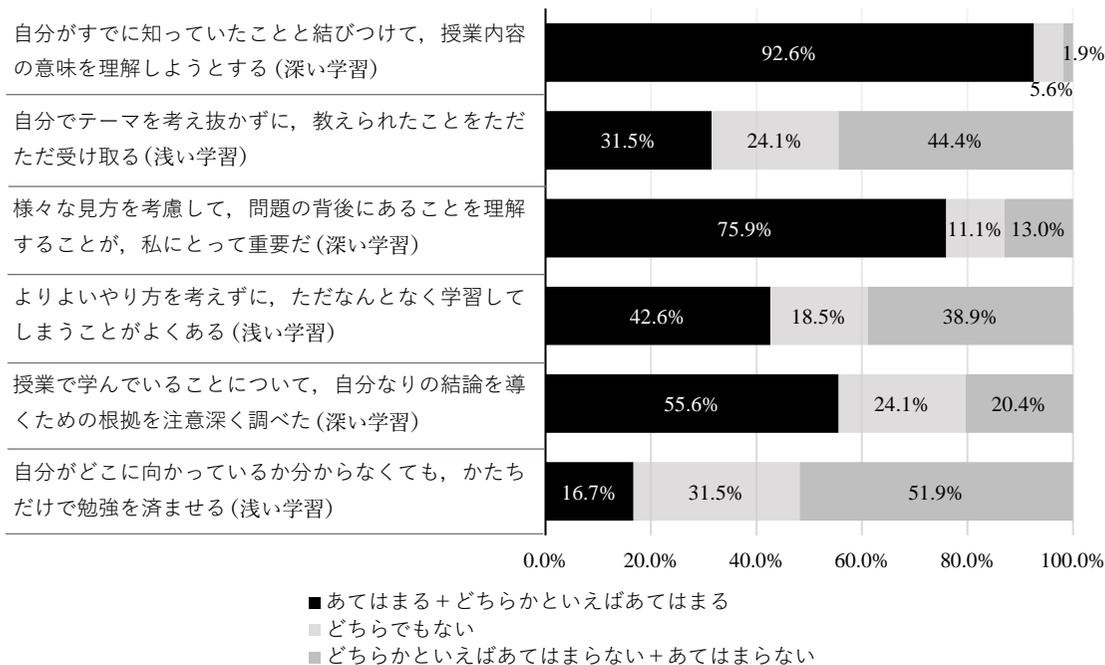


図5 進学先での学習アプローチ

を理解することが、私にとって重要だ(深い学習アプローチ)」(75.9%)であった。一方で、「どちらかといえばあてはまらない+あてはまらない」では「自分がどこに向かっているか分からなくても、かたちだけで勉強を済ませる(浅い学習アプローチ)」(51.9%)と「自分でテーマを考え抜かずに、教えられたことをただ受け取る(浅い

学習アプローチ)」(44.4%)が高い割合を示していた。上記より、多くの東大附属の卒業生が進学先においても深い学習アプローチを実践していることが理解されよう。

次に、図6の「進学先での演習授業への取り組み(4件法「1:あてはまる—4:あてはまらない」)において、「あてはまる+まああてはまる」と回

議論の場面では、他者の意見の要点をふまえた発言ができた
 発表の時、みんなにわかりやすく説明できた
 情報収集や発表の仕方に、東大附属での「総合学習」の経験が役立った

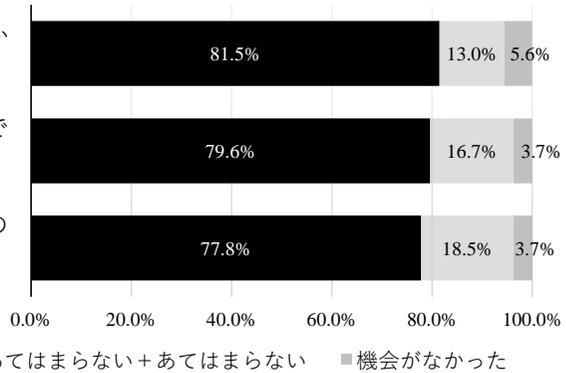


図6 進学先での演習授業への取り組み

早い時期に研究テーマを定めることができた
 必要な情報(文献、資料など)を十分に集めることができた
 先生の指導を受けなくても、自分で研究を進めることができた
 調査、実験、製作などに独自のアイデアを盛り込むことができた
 十分な内容の論文・レポートが書けた
 講義で学んだ内容の理解が深まった

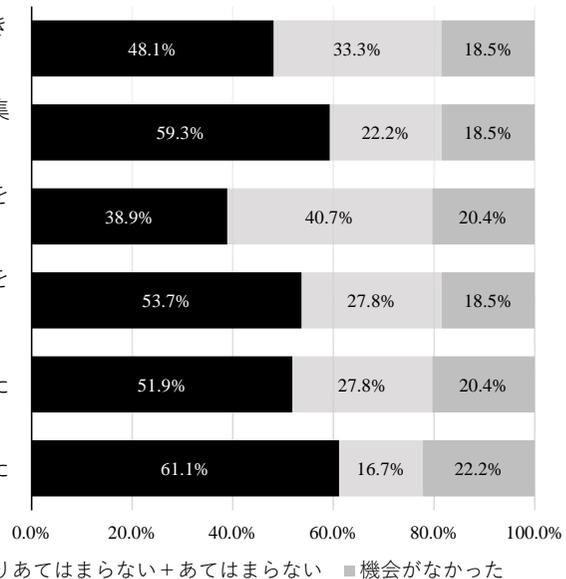


図7 進学先での卒研・卒論への取り組み

答した中で高い割合だったのは、「議論の場面では、他者の意見の要点をふまえた発言ができた」(81.5%)、「発表の時、みんなにわかりやすく説明できた」(79.6%)、「情報収集や発表の仕方に、東大附属での「総合学習」の経験が役立った」(77.8%)となっており、東大附属での学びが進学先での演習授業への取り組みに役立っていることがうかがわれた。

そして図7の「進学先での卒研・卒論への取り組み(4件法「1:あてはまる—4:あてはまらない」)では、「あてはまる+まああてはまる」と回答した割合は「講義で学んだ内容の理解が深まった」(61.1%)、「必要な情報(文献,資料など)を十分に集めることができた」(59.3%)、「調査,実験,製作などに独自のアイデアを盛り込むことができた」(53.7%)などで高い割合を示した。一方で、「あまりあてはまらない+あてはまらない」と答えた人のうち「先生の指導を受けなくても、自分で研究を進めることができた」(40.7%)が高

い割合を示しており、これらの結果は学生が主体的に学ぶ姿勢を培うことの難しさを示していると考えられる。

3.3 仕事先での学び

本節では仕事先での取り組みに関して2項目を扱い、現就労者20名を分析対象とした。まず「現職を選んだ理由(複数回答)」,次に「現職の職場環境(1:かなりあてはまる—4:あてはまらない)」である。「現職を選んだ理由」の質問項目は『21世紀出生児縦断調査(平成13年出生児)第18回調査』(文部科学省,2020)より抜粋した。「現職の職場環境」の質問項目は職業価値観尺度(菰田,2007)の下位尺度である自己価値より5項目を抜粋,新規の項目として「職場の環境全般に満足している」を追加し,回答は前回の卒業生パネル調査(喜入,2019)で使用した中村他(2018)のESSM全国調査に準拠した。

まず図8に示したように、「現職を選んだ理由」

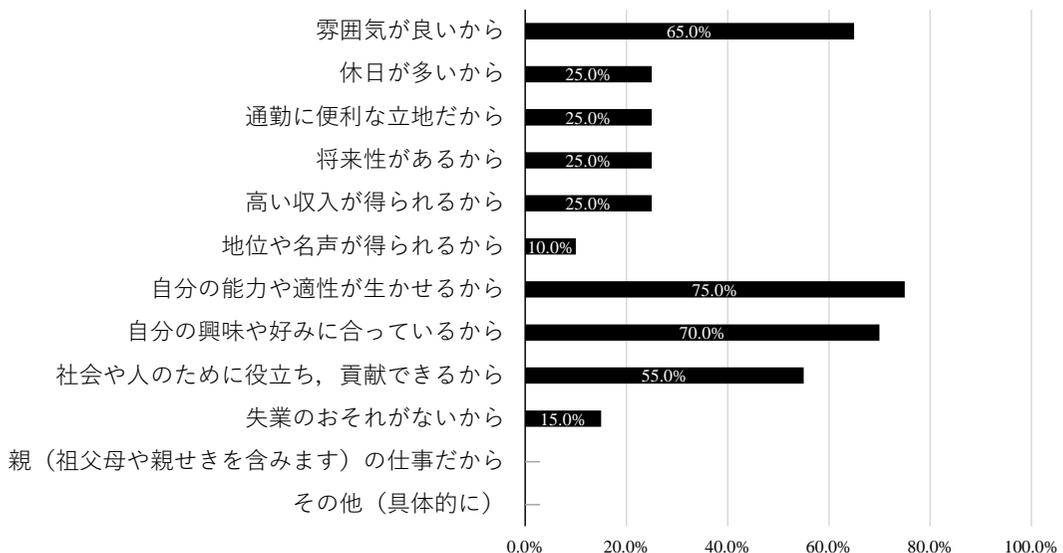


図8 現職を選んだ理由(複数回答)

では「自分の能力や適性が生かせるから」(75.0%)、「自分の興味や好みに合っているから」(70.0%)、「雰囲気が良いから」(65.0%)、「社会や人のために役立ち、貢献できるから」(55.0%)などが高い割合を示した。低い割合としては「親(祖父母や親せきを含みます)の仕事だから」(0%)や「地位や名声が得られるから」(10.0%)などであった。これらの結果から、東大附属の多くの卒業生が自己分析をした上で自分に合った現職を選択していることがわかる。

次に、図9の「現職の職場環境」では、「かなりあてはまる+ある程度あてはまる」と回答した者はいずれの項目でも75.0%を超えたが、とりわけ「職場での経験が自身の成長につながる」(100.0%)、「やりがいのある仕事ができる」(95.0%)、「自分の能力が生かせる仕事ができる」(90.0%)、「自分の個性が生かせる仕事ができる」(90.0%)などが高い割合を示した。上述より、多くの東大附属の卒業生が仕事に対して前向きに取り組んでいることが理解されよう。

3.4 新型コロナウイルス感染症拡大の影響

本節では新型コロナウイルス感染症拡大に伴う生活の変化に関する項目を取り上げる。2022年2月現在でも、大きな社会問題となっている新型コロナウイルス感染症について、近視予防フォーラム(2020)の調査ならびに在校生パネル調査(上野・日高・福留, 2022)で使用された項目を参考に、感染拡大前と比較して現在の状態を問う9項目(5件法「-2:とても減った—2:とても増えた」)を設定した。

集計の結果、図10に示したように、「とても減った+少し減った」なかで顕著なのは「外出」(89.1%)と「友人との関わり」(76.4%)である。一方で、顕著に「少し増えた+とても増えた」のは「家の中で過ごす時間」と「パソコンやスマートフォンの利用時間」(いずれも87.3%)である。新型コロナウイルスの影響を受けて外出して他者と過ごす時間が減り、家の中で過ごし、パソコンやスマートフォンを使用する時間が増えたことが理解される。

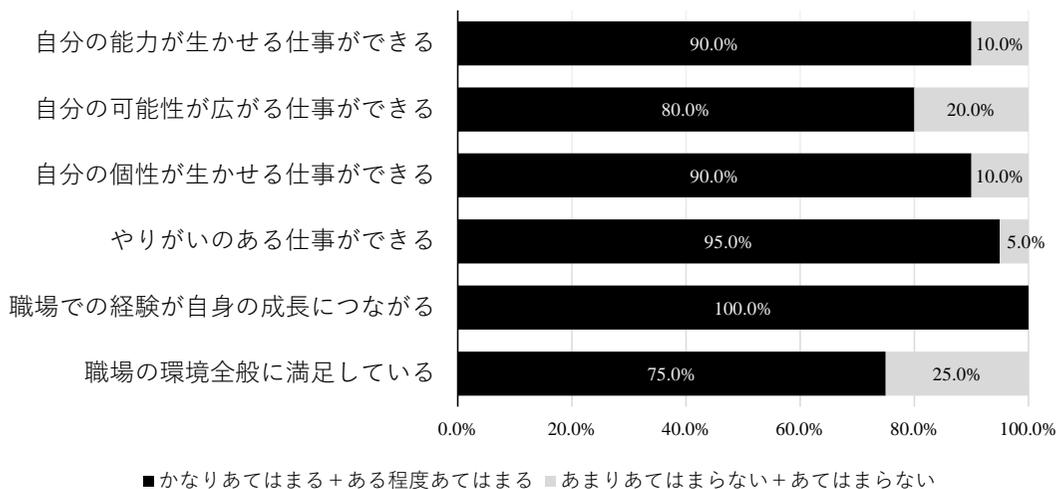


図9 現職の職場環境

3.5 探究性・市民性・協働性

本節では東大附属の教育で掲げている探究性・市民性・協働性⁴⁾に関する項目について取り上げる。当調査で使用した項目は当該中等教育学校の教育目標（東京大学教育学部附属中等教育学校，2018）を参考に，当該パネル調査のワーキンググ

ループに所属する教育学などを専門とする研究者と，当該の中等教育学校の教員を中心とした約20名の専門家にて作成され，各資質4項目ずつの計12項目で構成される。

図11で示したように，現在の調査協力者の各項目への回答（5件法「1：とてもあてはまる—5：

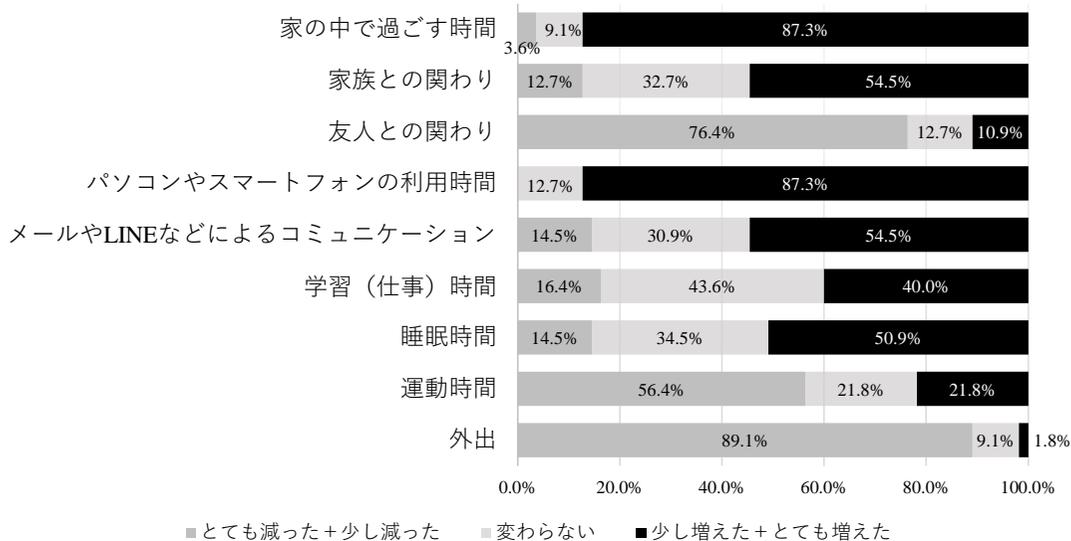


図10 新型コロナウイルス感染症拡大に伴う生活の変化

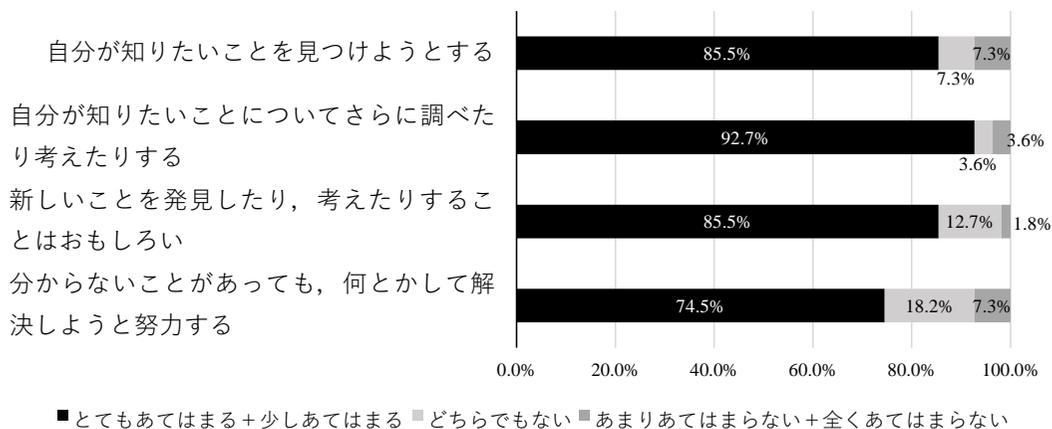


図11-1 探究性

全くあてはまらない)は、「とてもあてはまる+少しあてはまる」について、「自分が知りたいことについてさらに調べたり考えたりする(探究性)」(92.7%),「他の人の考えや意見をよく聴く

(協働性)」(90.9%),「他の人の考えや意見の違いを受け入れ,話し合う(協働性)」(89.1%)などの項目では高い割合を示した。一方で、「自分には関係が無さそうに見えることでも自分自身

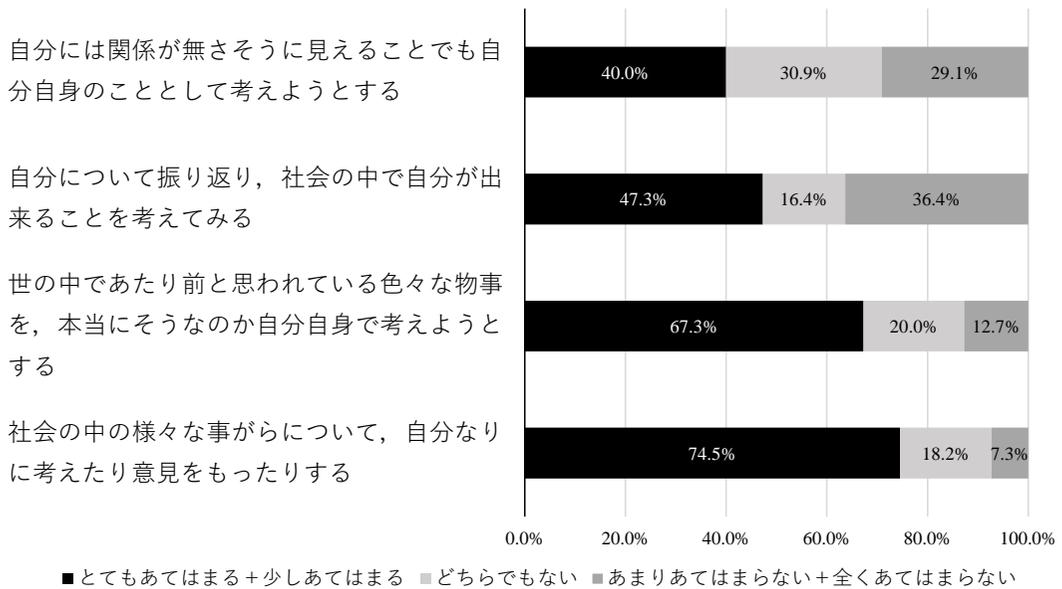


図 11-2 市民性

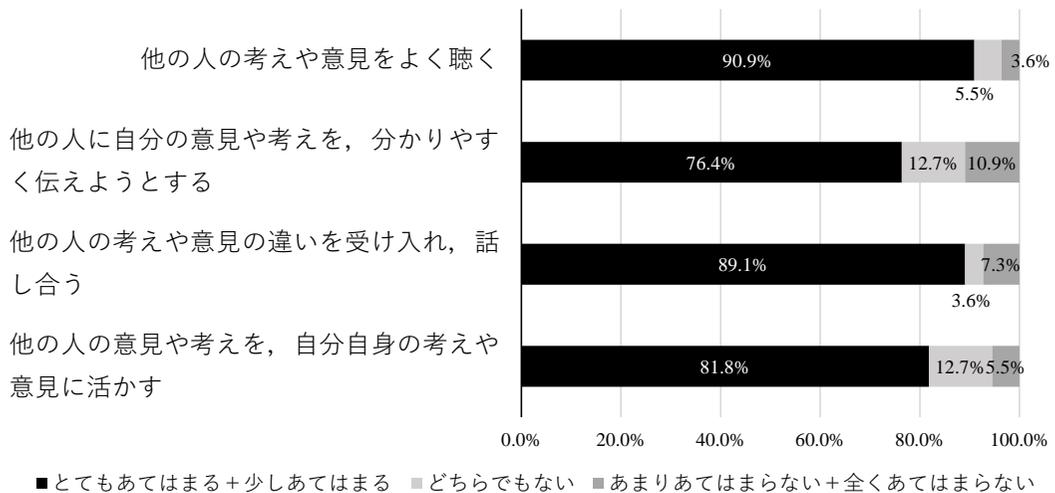


図 11-3 協働性

のこととして考えようとする(市民性)」(40.0%)、「自分について振り返り、社会の中で自分が出来ることを考えてみる(市民性)」(47.3%)などでは低い割合に留まった。これらの結果から、東大附属における学びは探究性や協働性の向上に関してはよく貢献しているが、市民性の向上に関しては改善の余地があることを示している。

4 考察と今後の課題：探究性・市民性・協働性の涵養に焦点をあてて

以上の卒業後継続調査の結果から、中等教育における学びはいかに高等教育と仕事に接続したのかという視点から、特に東大附属の教育目標である探究性・市民性・協働性の資質涵養に注目して以下のことを指摘する。

4.1 東大附属における学び

東大附属における学びのうち、当報告書では「3, 4年生での課題別学習について」と「5, 6年生での卒業研究について」について「とても興味を持って取り組んだ+やや興味を持って取り組んだ」生徒がそれぞれ89.1%と85.5%存在したこと、総合学習内での学習経験である「課題別学習」と「卒業研究」において「よくやった+時々やった」が最も低い割合でも67.3%で、それ以外のすべての項目で69.1%以上であり、多くの卒業生が概ね主体的に総合学習に取り組んでいたことがわかる。

また、総合学習に対する効力感「課題別学習」と「卒業研究」において「特に効果があった+効果があった」との回答があったもののうち、「他の人と協力して、課題に答えを出そうとする態度を身につけること」が「課題別学習」では70.9%であったのに対し、「卒業研究」では49.1%に留まったこと、その一方で、「与えられた情報から自分なりに考え、判断する力を身につけること」

で「特に効果があった+効果があった」と回答した卒業生は「課題別学習」では60.0%であったが、「卒業研究」では90.9%であったことから、「課題別学習」の頃にはまだ定まっていなかった知的関心が、時間を経るにつれて広がりや深まりを見せ、「卒業研究」を行ったことによって物事について自分の意思で考え、判断する能力を形成できたと考えられる。

4.2 進学先での学び

次に、上述の東大附属における総合学習は進学先での学びにどのように接続したのだろうか。

「進学先での学習アプローチ」において、「あてはまる+どちらかといえばあてはまる」と回答した者のうち、高い割合を示したのは「自分がすでに知っていたことと結びつけて、授業内容の意味を理解しようとする(深い学習アプローチ)」(92.6%)や「様々な見方を考慮して、問題の背後にあることを理解することが、私にとって重要だ(深い学習アプローチ)」(75.9%)などであったが、これらの結果は探究性・市民性・協働性のうち特に探究性の発達に深く関わっていると考えられる。

「進学先での演習授業への取り組み」においては、「あてはまる+どちらかといえばあてはまる」と回答した卒業生の割合は以下のとおりである。「議論の場面では、他者の意見の要点をふまえた発言ができた」(81.5%)、「発表の時、みんなにわかりやすく説明できた」(79.6%)、「情報収集や発表の仕方に、東大附属での「総合学習」の経験が役立った」(77.8%)など、いずれも高い割合を示した。このことは東大附属での総合学習における学びが進学先での演習授業の知的基盤となっており、探究性・市民性・協働性を涵養する基礎となっていることを示唆している。

次に「進学先での卒研・卒論への取り組み」であるが、「あてはまる+まああてはまる」と答えた人では「講義で学んだ内容の理解が深まった」(61.1%)、「必要な情報(文献、資料など)を十分に集めることができた」(59.3%)、「調査、実験、製作などに独自のアイデアを盛り込むことができた」(53.7%)などが高い割合を示した項目だが、他の質問項目の上位回答群の割合と比較して、それほど高い割合を示したわけではない。一方、「あまりあてはまらない+あてはまらない」と答えた人のうち「先生の指導を受けなくても、自分で研究を進めることができた」(40.7%)が最も高い割合を示した。これらの結果は、学生に主体的に学ぶ姿勢が期待されているとはいえ、高等教育の学部段階では能動的に知的活動を行える学生は東大附属出身者であっても多くはないこと、また学部段階では指導教員の丁寧な指導が充分必要とされること、などが示唆される。

4.3 仕事での学び

次に、現就労者のうち、「現職を選んだ理由」(複数回答)であるが、「自分の能力や適性が生かせるから」(75.0%)、「自分の興味や好みに合っているから」(70.0%)、「雰囲気が良いから」(65.0%)、「社会や人のために役立ち、貢献できるから」(55.0%)などが高い割合を示した。多くの卒業生が東大附属で培った学びの経験を生かして自分の能力や適性、興味関心と重なる仕事を選択していることがうかがわれる。

そして、現就労者のうち、「現職の職場環境」についてであるが、「かなりあてはまる+ある程度あてはまる」と答えた人のうち、「職場での経験が自身の成長につながる」(100.0%)、「やりがいのある仕事ができる」(95.0%)、「自分の能力が生かせる仕事ができる」(90.0%)、「自分の個性が

生かせる仕事ができる」(90.0%)などが高い割合であったが、これらの結果から、探究性・市民性・協働性のうち探究性と市民性に関わる項目が高い割合を示したことから、東大附属における総合学習での学びが仕事における考え方に接続していることが理解される。

以上より次のことを指摘する。探究性・市民性・協働性に関わる東大附属での総合学習の学びは、本田(2018)が指摘しているとおおり、探究性の志向性の強さが認められる。その一方で、市民性については探究性と同一水準で涵養できているとは言い難い。上野・日高・福留(印刷中)が指摘しているとおおり、中等教育において協働的に新たな考えを創り出す議論的体験を重ねることは、高等教育での議論の成功経験を介して個々人の市民性の涵養に繋がると考えられる。今後は市民性と協働性の涵養につながる学びをより重視する必要があるだろう。また探究性・市民性・協働性のいずれも東大附属での学びだけでなく、高等教育及び仕事での学びにおいてその資質が涵養された可能性もあることを考慮する必要がある。

4.4 新型コロナウイルス感染症拡大の影響

本調査が行われた2021年秋時点の新型コロナウイルス感染症拡大に伴う生活の変化として、外出して他者と過ごす時間が減少する一方で、家の中で過ごし、パソコンやスマートフォンを使用する時間が増加したことは、パンデミック下における総合学習の経験の長期的効果を知るうえで重要なデータとなるだろう。2022年2月現在、新型コロナウイルス感染症の収束は教育にとって依然として世界的課題であり、このような状況に対して日本の中等教育及び高等教育がどのように対処していくのかが問われるであろう。

4.5 探究性・市民性・協働性

調査時点（2021年9月から10月）での探究性・市民性・協働性の涵養については、以下に見るような特徴を指摘できる。「とてもあてはまる＋少しあてはまる」と回答した卒業生のうち、探究性のうち「自分が知りたいことについてさらに調べたり考えたりする」（92.7%）、協働性のうち「他の人の考えや意見をよく聴く」（90.9%）や「他の人の考えや意見の違いを受け入れ、話し合う」（89.1%）などでは東大附属の総合学習は探究性と協働性の涵養に貢献しているといえる。

一方、市民性のうち「自分には関係がなさそうに見えることでも自分自身のこととして考えようとする」（40.0%）、「自分について振り返り、社会の中で自分が出来ることを考えてみる」（47.3%）などでは低い割合に留まった。これらのことは東大附属における総合学習は、市民性のうち他者の視点に立って物事を考えることや、自己について内省的な視点を養うことについてはまだ改善できる余地を残していることを示している。

上述より次のことを指摘する。喜入（2019）によれば、東大附属での総合学習は探究性・市民性・協働性に基づく進学先での諸活動や調査時点における諸活動への関与をより高める可能性が指摘されている。しかし、本稿での分析から市民性については探究性・協働性と比較すると十分に涵養できているとは言い難い。そして、今後は市民性が探究性・協働性とどのように相互作用しながら培われているのかを注視し、市民性の涵養につながる学びを創意工夫して開発していく必要があるだろう。

4.6 今後の課題

今後の課題としては、引き続き実証的データの

蓄積が求められること、当報告書で取り上げられなかった項目についても分析を進める必要があること、特に今回は調査協力者が少数であったため、データの偏りや解釈に影響を及ぼすことに配慮し、当報告書の汎化性については慎重を期す必要があること、などが挙げられる。さらには、総合学習で培われた探究性の素地が豊かな東大附属の卒業生が、卒業後どのような社会生活を送り、どのような人格形成や能力形成を実践しているのか、今後も調査項目の設定を工夫しつつ継続して調査していく必要がある。また、今後の調査では総合学習に加えて、教科学習において探究性・市民性・協働性の素地がどのように育まれているのかを理解するための調査も必要となろう。

注

- 1) 東大附属卒後の進路ならびに進学先の学校種別の質問項目より進学者を抽出した。調査協力者55名のうち、54名が東大附属卒後に進学している。なお、分類不明者1名（在学者）は進路に対しては大学進学と回答しているが、学校種別では専門学校を選択している。当報告書では進学対象者として報告に含めているが、学校種別毎に検討する際には当該データの使用に留意する必要がある。
- 2) 進学先の卒業の有無、卒業後の進路、東大附属卒後の就職（収入を伴う仕事）と継続の有無、現就労の有無の質問項目より現就労者を抽出した。就業経験の有無の設定に対して現在就労していないと回答した35名のうち、1名は大学卒後進学・就職なし、1名は大学中退後進学・就職なし、7名は大学院進学者（うち、1名は過去に就労経験あり）、26名は在学者（うち、1名は過去に就労経験あり）であった。なお、現就労者の中に大学院在学者も1

名含まれる。当調査が実施された 2021 年は全国的に就職者も前年度と比較して低下傾向を示しており（厚生労働省, 2021）、コロナ禍の影響があったことは否めない。しかし、詳細については不明であるため、データ解析時には留意する必要がある。

- 3) 各々の図で提示したグラフでは項目毎の合計値が 100.0%にならないものが一部含まれているが、真のパーセンテージの大小関係を歪曲しないようにするため、調整しなかった(山口, 2015)。
- 4) 探究性・市民性・協働性の定義は 2018 年 3 月に作成された東京大学教育学部附属中等教育学校 (2018) における定義に従った。

謝辞

当報告書を執筆するにあたり、調査にご尽力を賜りました関係者の皆様、ならびに卒後継続調査（『学びと仕事の東大附属卒業生調査』）に快くご協力を賜りました、東京大学教育学部附属中等教育学校の 2016 年度卒業生の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 本田由紀 (2018) 「探究性・市民性・協働性」に関する東大附属中等教育学校生の特徴——在校生調査と他の調査との比較を通じて——『東京大学大学院教育学研究科紀要』58, 201-215.
- 荻谷剛彦 (2013) 「東大附属で学んだことの意味」東京大学教育学部附属中等教育学校(編)『学び合いで育つ未来への学力——中高一貫教育のチャレンジ——』明石書店, 168-181.
- 河井亨・溝上慎一 (2012) 「学習を架橋するラー

ニング・ブリッジングについての分析：学習アプローチ, 将来と日常の接続との関連に着目して』『日本教育工学会論文誌』36(3), 217-226.

川本哲也 (2020) 「都内中等教育学校における主体的・探究的な学びとその効果——自尊心の調整効果に着目して——」『東京大学大学院教育学研究科紀要』59, 517-526.

喜入暁 (2019) 「東大附属中等教育学校卒業生の特徴——「学びと仕事の東大附属卒業後」から浮かび上がる卒業生の姿——」『東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター研究紀要』4, 107-126.

近視予防フォーラム (2020) 「「新型コロナウイルスによって変化した子どもの生活実態」に関する調査」 Retrieved from [https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000002.000060256.html] (accessed on February 19, 2022)

菰田孝行 (2007) 「大学生における職業価値観と職業選択行動との関連」『青年心理学研究』18, 1-17.

厚生労働省 (2021) 「令和 2 年度大学等卒業者の就職内定状況調査」 Retrieved from [https://www.mhlw.go.jp/content/11804000/0305000796668.pdf] (accessed on February 17, 2022)

溝上慎一・森朋子・紺田広明・河井 亨・三保紀裕・本田周二・山田嘉徳 (2016) 「Bifactor モデルによるアクティブラーニング(外化)尺度の開発」『京都大学高等教育研究』22, 151-162.

文部科学省 (2020) 『21 世紀出生児縦断調査 (平成 13 年出生児) 第 18 回調査』 Retrieved from

- [https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa08/21seiki/kekka/1420755_00001.htm]
(accessed on February 22, 2022)
- 山口 洋 (2015) 「四捨五入した%の合計が 100%にならないとき」『佛教大学社会学部論集』60, 111-129.
- 中村高康・平沢和司・荒牧草平・中澤 渉 (編)
(2018) 『教育と社会階層——ESSM 全国調査からみた学歴・学校・格差——』東京大学出版会
- 清水裕士 (2016) 「フリーの統計分析ソフトHAD——機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案——」『メディア・情報・コミュニケーション研究』1, 59-73.
- 東京大学教育学部附属中等教育学校 (2018) 『文部科学省研究開発学校 平成 29 年度研究開発実施報告書 (第 2 年次)』
- 東京大学教育学部附属中等教育学校 (2020) 『入学案内 2020 未来にひらく自己の確立』
Retrieved from [https://www.hs.p.u-tokyo.ac.jp/schoolguide2020/#target/page_no=1] (accessed on February 26, 2022)
- 東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター (2018) Retrieved from [https://www.schoolexcellence.p.u-tokyo.ac.jp/db/grad_survey/] (accessed on March 9, 2022)
- 上野雄己・日高一郎・福留東土 (印刷中) 「中等・高等教育での議論経験がもたらす市民性の涵養」『日本教育工学会論文誌』46(2).
- 上野雄己・日高一郎・福留東土 (2022) 「コロナ禍における中高生の生活の変化——都内中等教育学校を対象としたパネル調査から見えてくるもの——」『東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター研究紀要』7, 87-100.

Copyright © Center for Advanced School Education and Evidence-Based Research
Graduate School of Education, The University of Tokyo

東京大学大学院教育学研究科附属 学校教育高度化・効果検証センター
Center for Advanced School Education and Evidence-Based Research,
Graduate School of Education, The University of Tokyo
WEBSITE (日本語): <http://www.schoolexcellence.p.u-tokyo.ac.jp/>
WEBSITE (English): <http://www.schoolexcellence.p.u-tokyo.ac.jp/en/>